

ナシ黒斑病（病原菌：*Alternaria alternata* Japanese pear pathotype）

○ 被害と発生生態

「二十世紀」や「新水」等に発生し、「幸水」や「豊水」には発生しない。花弁、果実、葉、伸長中の枝などに発生する。葉の病斑ははじめ小さな黒色斑点で、次第に拡大して黒色の不整形病斑が形成され、病斑を中心にして葉がゆがむ。激しく発病すると落葉する。生育中の果実に発生すると亀裂を生じ、次々と落果する。成熟果では同心輪紋状の病斑に拡大して軟化腐敗する。

病原菌の越冬伝染源は枝病斑、病芽(ボケ芽)、落葉等で、風や雨により孢子が飛散して伝染する。生育期間の伝染源は、主に葉や果実の病斑上に形成された孢子である。

病原菌の孢子形成は 10～12℃から始まり、20～25℃で最も多い。侵入温度は 15℃前後から始まり適温は 28℃である。梅雨期の高温多湿条件で葉の発病が急増する。

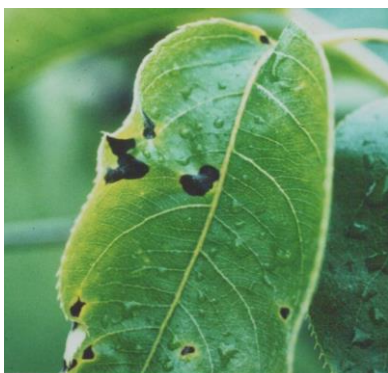
○ 防除方法

(ア) 耕種・物理的防除

- ・ 萌芽期から開花までに、伝染源となる枝病斑の封じ込めとボケ芽の切り取りを十分に行い、春の伝染源を少なくする。
- ・ 小袋掛けは孢子飛散量が急増する5月下旬までに終える。
- ・ ほ場を定期的に見回り、落下した果実は拾い集め、園外に持ち出し処分する。
- ・ 耐病性の「ゴールド二十世紀」に更新する。

(イ) 薬剤防除

- ・ 果実感染の最も主要な時期である開花期～小袋掛け期の防除を徹底する。
- ・ 梅雨期は発病蔓延期にあたるため、薬剤散布間隔を短くし防除を徹底する。梅雨期以降は、十分な量の薬液を丁寧に散布する。
- ・ 盛夏期及び秋期(9～10月)にも発病が増加するため、定期的に薬剤散布を行う。
- ・ 耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。なお、ポリオキシ剤の耐性菌が県下全域で発生しているため、有機銅剤と混用して使用する。



葉の病斑



果実の被害



枝の病斑